



# 年頭所感

## 新春 特別寄稿

日本ガス株式会社代表取締役社長  
鹿児島国際大学 学長

津曲 貞利氏

つまがり・さだとし

### 「プロフィール」

1956年鹿児島市生まれ。昭和55年早稲田大学卒業。  
東京ガス(株)を経て、昭和59年に日本ガス(株)入社。  
平成20年6月、代表取締役社長就任。  
また、平成21年4月、学校法人津曲学園理事長就任。  
平成25年4月、鹿児島国際大学学長就任。  
この他、鹿児島経済同友会副代表幹事、鹿児島商工会議所副会頭を務める。

昨年暮れの衆議院総選挙は、安倍総理率いる与党の圧勝で終わったが、アベノミクスと称せられる大胆な経済政策に対する信任というより、デフレスパイラルに陥って出口の見えない閉塞感が漂った旧政権の記憶が鮮明に残っており、その時代には戻りたくないという気持ちの表れだったのではないだろうか。

アベノミクスに対する評価はまだ定まっていない。道半ばとみるか、効果薄とみるかは意見の分かれるところだろうが、金融の大胆な量的緩和は円安と投資意欲の促進をもたらし、輸出産業は力を取り戻しつつある。株価は上昇し、富裕層の個人消費は高級品を中心に上昇に転じた。機動的財政政策の導入により一部の公共投資は増加しているが、東日本大震災の復興需要、さらにはオリンピックの東京開催決定などによりその配分が東高西低になっていることは否めない。成長戦略については、輸出産業や大企業は円安と量的緩和によりその恩恵を享受するだろうが、内需を主軸とする中小企業や地場産業においては寧ろ原材料価格高騰の悪影響が出ており、力強さが顕在化しているわけではない。消費増税はその成長に水をかけた形となった。

もともとアベノミクスの大胆な金融・財政政策は2年が限度であり、この間にデフレを脱却し

平成27年の新春を迎え、  
謹んでお慶び申し上げます。

て景気を回復し、賃金と個人消費を上昇させ、税収を増やさなければ日本の財政は破たん近く、と警鐘を鳴らすエコノミストが多かった。まさにその2年が過ぎ、誰もが予想しなかった衆議院解散総選挙を実施した安倍政権は、大勝利と引き換えに消費税の増税を1年半後ろ倒しにして、待ったなしの経済成長を実現しなければならない宿命を背負った。

衆議院選挙を終え、日本はこれから数年安定した政権下で経済政策が進められることになるが、中国を始めとする新興国における景気低迷の兆しとアメリカ発のシェールガス・オイル革命及びOPECの減産見送りによって生じた原油価格の急落、そしてそれに付随する資源国の財政問題は、世界経済の新たな火種となる可能性がある。米国は勿論のこと、日本や欧州など先進国にとっては原油価格の低下は製造業を中心に景気回復の呼び水になることが期待されるが、早くもデフレ懸念の声が上がり、再び利下げと量的緩和の気配が漂っている。この原稿を書いている12月末時点の状況も、読者の皆様の目に届く1月中下旬には、どうなっているか正直なところさっぱり予測がつかない。近年、為替も株価も原油価格も、ついでに天候も、昔とは比較にならないほど目まぐるしく変化する。

日本では少子高齢化による生産力と消費減退への危機感から、地方の企業にも流動化と国際化への対応力が問われるようになった。確かにアベノミクスは円安を誘導し、観光業と輸出産業にとってはフォローウィンド(追い風)となった。地域企業の生き残り施策として、近年脚光を浴びているのが、第六次産業という概念である。つまり、農業、漁業、林業などの一次産品を県内で二次加工して地元で販売するとともに、観

光業および流通業とタイアップして県外・海外の拠点でアピール・販売し、流入観光客と購買顧客を同時に獲得するという手法である。私は縁あって鹿児島相互信用金庫のそうしんビジネス・イノベーション大賞の選考委員を仰せつかっているが、鹿児島にも地元産品や独自の技術を活かし、県外、海外で高い評価を得て、業績を伸ばしている企業が沢山存在することは非常に頼もしい限りだ。これらの企業を調査分析してみて感じることもある。それは「グローバル化」と「独自能力の開発研鑽」を両輪とするイノベーション、最初に生じるのはほぼ間違いなく「独自能力の開発研鑽」であることだ。

禅の世界に「明珠掌在(みょうじゅたなごころにあり)」という言葉がある。「明珠即ち大切な宝は、実は自分の掌の中にある」という意味で、外に優れたものを探し求めるのでなく、自分を磨くことによって自らを優れたものに導くことの大切さを説いたものである。二人兄妹のチルチルとミチルが、夢の中で未来や過去の国に出かけ、幸せの象徴である青い鳥を見つける旅をするが、結局捕まえることができないまま夢から覚めてみると、自分の家の鳥かごの中に青い鳥が居て、実は幸せは自分の手元にあったというフランスのノーベル賞作家モーリス・メーテルリンクの童話「青い鳥」の話も同様の示唆を与えてくれる。

企業経営者に必要な視点として、鳥の目(物事を広く俯瞰する巨視的視点)と虫の目(事象を細かく精査探究する微視的視点)を挙げる識者は多い。上場会社を中心とする大企業は、ある意味世界に活路を求め、取引先を増やし、売り上げを向上させることを宿命づけられている。そこでの世界観は巨視的視点であろう。しかしながらこの世界では、売上高や取扱商品数、顧客数や株価などの数値拡大に向けた熾烈な競争を永遠に続けなくてはならない。一方中小企業や地場産業においては、そのような巨大市場にいきなり打って出るような財力もマンパワーも持ち合わ

せていない。まずはこれまでのお取引先や地元のニーズ、あるいは大手では気づかない手の届きにくい分野を丁寧に掘り起し、地道に問題解決を図り顧客満足を追求することから始めるべきだろう。そこで必要とされる目は事象を細かく精査探究する虫の目だ。この二つの目に優劣はない。重要なポイントは世界の見方である。グローバルな拡大基調の世界に身を委ねるのか、それとも虫眼鏡を飛び越え、比喩的に言えば顕微鏡を駆使してミクロの世界に活路を見出そうとするのか。どちらも「世界」であることは変わらないが、地域を愛し、地域で生活を営む人間にとっては、量的拡大に翻弄されるマクロ世界より、寧ろ一人一人の顔の見えるミクロ世界に無限を感じるの方が大切なのではないだろうか。ミクロ世界への執着、つまり地元産品や独自能力の弛まぬ開発研鑽を通じて地域の顧客や元請け、上得意客に評価され、評判を生む。それらが整ったのちに鳥の目が必要となってくる。初めて羽ばたく鳥の目は、先ずはさらなる技術技能の高まりと市場動向を見極め、同業他社や異業種のリサーチを丁寧に言い、やがて機が熟せば新天地へ飛び立つ気力と体力も充実してくるだろう。その機が新たなイノベーションのきっかけとなるのである。鹿児島相互信用金庫はそういう企業の虫の目を支援し、鳥の目のお手伝いをしてくれる金融機関である筈だ。しかしあくまでもその源はそれぞれの企業の「独自能力の開発研鑽」にある。

「明珠掌在」 青い鳥は、まさに我々一人一人の掌の上にとまっているのだ。